近世日本天文学（暦学）人物伝　（5）

渋　川　景　佑

渋川景佑しぶかわかげすけ 1787-1856（天明 7-安政 3），天文方高橋至時の次男として大阪に生れ，幼名を善助といった．至時の天文方任命後，寛政 9 年頃（1797）江戸出府，父から天文暦学の教育を受けると共に，兄景保（かげやす）同様，昌平黌に学んだらしい．オランダ語もこの頃から学び始めたものだと思われる(*)．文化 2 年（1805），天文方高橋景保の配下であった伊能忠敬に同道して，中国地方の測量に約 2 年間従事した．文化 5 年（1808），天文方渋川正陽（まさてる）から請われて養子に入り，名を渋川助左衛門景佑と改める．次いで翌年，渋川家の家督を相続して天文方に任ぜられた．

景佑は，父の至時が死力を注いで果せなかった「ラランデ暦書」の翻訳に兄景保と共に携わっていたが，景保がシーボルト事件の罪を得て獄死して後は，足立左内と共にその業を進め，天保 7 年（1836），「新巧暦書」40 冊，「新修五星法」10 冊として大成し，これらを幕府に呈上した．天保 10 年（1839）には御鉄砲簞笥奉行格を仰せつかっている．

当時使われていた寛政暦は施行後 40 年を経過し，実際の日月食と暦面の記載とはかなりの食違いを見せるようになった．そしてついに天保 12 年（1841），先に献上した「新巧暦書」にもとずいて改暦を行なうよう，申し渡しがあった．天保 13 年（1842）4 月には改暦御用のため上洛，僅か 3 ケ月余で帰府した．至時らが苦労した寛政度改暦の時とは違って，この度の改暦は宮廷天文学者に対して，幕府側の一方的主導権のもとに進められたことがわかる．帰府後は，飯田町九段坂上に完成した九段坂測量所の役宅へ移った．「天保壬寅元暦」という名で弘化元年（1844）から実施された，いわゆる天保暦は，暦面に不定時法を採用したこと，24 気に，太陽がある黄経に来た時の実際の時刻を当てたこと（定気）の 2 点で，それ以前の邦暦と違った特徴を出している．天保暦の暦理を撰述した「新法暦書」は嘉永二年（1849）に進献され，他の天文方と共に賞せられた．また弘化元年には，幕府閣老から催促を受けながら，のびのびになっていた寛政暦の暦理撰述を，寛政暦成立後漸く 50 年にして，「寛政暦書」35 冊，続録 5 冊として，呈上することができた．

天保 9 年（1838）11 月から，手伝，下役らを多数動員して組織的な天体観測を始めた．太陽，太陰，五星，恒星，日月食の外に，掩蔽などの記録も含む．観測は安政元年（1854）末まで続けられた．寒暖計，気圧計の測定も付されており，東京商船大の天野隆治氏はこれらのデータを元にして当時の気象を議論しておられる．観測結果は霊憲候簿として 2 度にわたって呈上された．弘化呈上時の原稿 99 冊が東京天文台に，献上浄書本 202 冊が内閣文庫に現存している．こうした大がかりな観測を行なった背景には当然ラランデ暦書等の西洋天文学の影響があるのだろうが，自分達の得た観測データを日月，惑星の軌道改良に役立てるべく意図したような形跡はまったく見られない．この意味で景佑もまた，近代以前の天文学者であった．

測量御用は従来高橋家の担当になっていたが，景保の判決と共に配下の者は多く連座処罰され，測量方の活動は，壊滅状態に瀕していた．幕府はこの異常事態を改めるべく，天保 9 年（1838）ついに測量御用の取扱いも景佑に命じた．若い頃の中国筋測量の経験を買われたものであろう．嘉永元年には，測量の知識と技術を書き記した「遠鏡町見手引草」（1848）を完成して献上している．

景佑は兄景保ほど多方面に才気煥発ではなかったが，それだけに天文暦学一筋に打込んで，堅実に多くの業績を上げた．著述の数と量でも景佑の右に出る天文暦学者はいない．景佑の編纂になる「明時館叢書」（現存 4 冊）は，春海以来の渋川家関係など我国天文暦法史研究の宝庫といってよい．また「明時館図書目録」の名で伝えられる景佑の蔵書目録中には，自著・原稿の部がかなりの部分を占め，豊富な著述活動の跡が窺われる．これらの中には，普通なら棄ててしまうような反故，断簡零墨の類も一つ一つ丁寧に綴り合わせて整理されており，景佑の着実で几帳面な性格を偲ぶことができる．

実際，景佑は自他共に許すまことの学者であった．景佑はその生涯において，二度の危機に見舞われている．一つは先に述べたシーボルト事件であり，もう一つは長子敬直（ひろなお）の一件である．シーボルト事件の時は，既に高橋家から出て渋川家を嗣いだ身であったとはいえ，景保の近親者に対してとられたような措置は受けず，少くとも表面上は何のお咎めもなかったらしい．長男の六蔵敬直は早くからその才幹を買われて，天文方見習いの身でありながら弱冠 33 歳で書物奉行に取立てられる破格の待遇を受けた．水野忠邦の三羽烏と称されて幕政にまで関与した．だがオランダ外交文書の翻訳を漏らした廉で失脚し他家へお預けとなった．この時も景佑には表向き何の影響もなかったばかりか，次男の膳司（佑賢（すけかた））を総領に直すことを願い出て許されている．出所進退の折目正しい真の学者として，幕府要路の高い評価を得ていたことがわかる．

品川東海寺にある墓碑と過去帳には安政 3 年（1856）6 月 20 日没としてあるが，「天文方代々記」には安政 4 年隠居と記されていて矛盾する．代々記の単なる誤写とする説と，伊能忠敬の如く喪を秘したとする説がある．過日，山の手線大崎駅から徒歩 10 分程の，東海寺墓所の中にある渋川家代々の墓石の前に佇んでぼんやりしていると，僅か 2～3m の所を新幹線が轟音をあげて走り去り，ハッと我にかえった．　（中村　士）

(*)　東北大の吉田忠氏は最近，「西暦聞見録」を調査され，景佑は文政頃は蘭学者藤井方亭から蘭語の教えを受けていたことを明らかにしておられる．

平成元年 4 月 20 日	発　行　人	〒181 東京都三鷹市国立天文台内	社団法人　日本天文学会
印刷発行	印　刷　所	〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町 565-12	啓文堂松本印刷
定価 464 円	発　行　所	〒181 東京都三鷹市国立天文台内	社団法人　日本天文学会
(本体 450 円)		電話　(0422)　31—1359	振替口座　東京 6-13595